

目的 食品の色に関する嗜好性について、1972年から開始した調査結果と女子大生の官能検査結果から「色と食欲との関連性、色彩嗜好の発達、マンセルの色票に対する嗜好度との関連性、食物嗜好と連想食品との関連性」など4報にわたり家政学会総会で報告した。色彩に関する研究報告は、意匠学と心理学の方面に多く見られるが食品関係では十分ではない。今回は色彩に対する嗜好度、連想食品、Semantic differential法(SD法)により、年齢間および男女間の相違について検討した。

方法 嗜好度と連想食品については、第2報(第32回総会)のデータ(12~20才、2,267名)を基本に、「赤、オレンジ、茶、黄、黄緑、緑、青、紫、ピンク」の9色を χ^2 検定と相関係数などにより分析した。F. Birren は嗜好度を食欲増進・減退の度合として表わしている。本報では、右に示すSD法により食欲増進に起因する因子についても分析した。

結果 1)5点法による嗜好度は、赤、オレンジ以外は年齢差が有意であった。2)男女間には0.0986~0.6707の相関係数が得られた。3)連想食品群の出現率は、年齢、男女間の差があるが主な食品名には大差が見られない。4)50%以上の女子高校生が連想した食品は、柑きつ類、桃、レモン、りんご、なすであった。5)SD法の結果からは、それぞれ9色の食欲増進に起因する因子とその程度を把握した。

